

# 忘れられたものの記録——アムドの一九五八年前後——(上)

阿部治平

## はじめに

ここに、前世紀の五〇年代後半にチベット人地域で勃発した反乱・逃亡などのうち、チベット高原東北部のアムド地方で起こった蜂起の概略を記す。

以前、『甘孜藏族自治州民主改革史』（四川民族出版社、二〇〇〇年）を検討して「カムパ反乱」をおおまかに見たとき、従来考えていたよりもカムの反乱は地域が広範で参加者が多いうえに、犠牲者数も社会構造への破壊的影響も甚大だったことがわかった。このときアムドでも反乱があったことは知っていたが、カムほどの死者と破壊はあるまいと考えていた。ところが、青海チベット人地域の農法と黄土高原のそれとの異同について調べるため『州誌』『県誌』を読むうちに、アムドの反乱の規模と鎮圧時の破壊と犠牲者はカムに匹敵する規模であって、五八年になると数千人から一万人規模の集団「逃散」が発生したこともわかってきた。もちろん『地方誌』では記録の対象が編集主体の行政範囲に限られるから、ひとつづきの事件も

ばらばらにされ、しかも厳密に定められた編集方針に従って項目に断片的に記録しているために事件の全体像がわかりにくい。そして、いうまでもなく『地方誌』は鎮圧する側の論理でつらぬかれている。反乱を体験したものはもう少なくなっている。たまにいたとしても悲惨な体験をよそ者に語る環境にはない。実相はだんだんうすぐらい歴史の闇に入っていく。

このように『地方誌』を主な資料としたので、この小論は反乱を起こし鎮圧された側の視点を大きく欠くものとなった。アムドの反乱を「反革命」として断固鎮圧したのは正しかったと中国では今でもいわれている。わたしは、これを肯定したり否定したりする立場にない。せめて記録の断片をつなぎあわせて、忘れられた歴史の一ページを補いたいと考えたのがこの小論を書く動機である。

アムドはチベット語アムド方言を話す地域をさしており、青海省の大部分と甘肅省甘南藏族自治州と四川省阿壩藏族自治州を網羅している。青海省では玉樹藏族自治州だけがカムの土地である。このため今日アムドの一体性は失われつつあり、

青海チベット人は西寧と、甘肅南部は蘭州と、四川チベット人は成都との結びつきが強くなっている。カム同様アムドがこのようにばらばらになったのは清朝の分割統治以来のことである。青海少数民族にはアムド＝チベット人（アムドワ）についてモンゴル人が多く、回・羌・土（ツァハン＝モンゴル）・サルなどの多種の少数民族があり、青海省人口の半数に近い。また半数強をしめる漢民族は西寧盆地など東部農耕地帯と地方都市に多い。

## 一 アムド「民主改革」以前

清朝は青海チベット人を千百戸制によって、モンゴル人を旗制によって支配した。民国時代はおおまかには西寧のムスリム軍閥馬麒・馬步芳一族に支配されていた。甘肅・四川地域には土司領・寺領もあり、さらにそれが清朝末から民国にかけておこなわれた「回土帰流」<sup>③</sup>によって「流官」（国家官僚）支配となる地域もあった。

一九四九年九月中国共産党（中共）西北局＝人民解放軍第一野戦軍司令彭徳懷は、西寧軍閥馬步芳軍を撃破して西寧を制圧すると、すぐにチベット人幹部タシワンチュク（扎喜旺徐）<sup>④</sup>をツァイダム<sup>⑤</sup>のシャン（香日徳）に送り、幼いパンチェン＝ラマ十世の候補者を掌握して、のちのチベット政策に備えた。

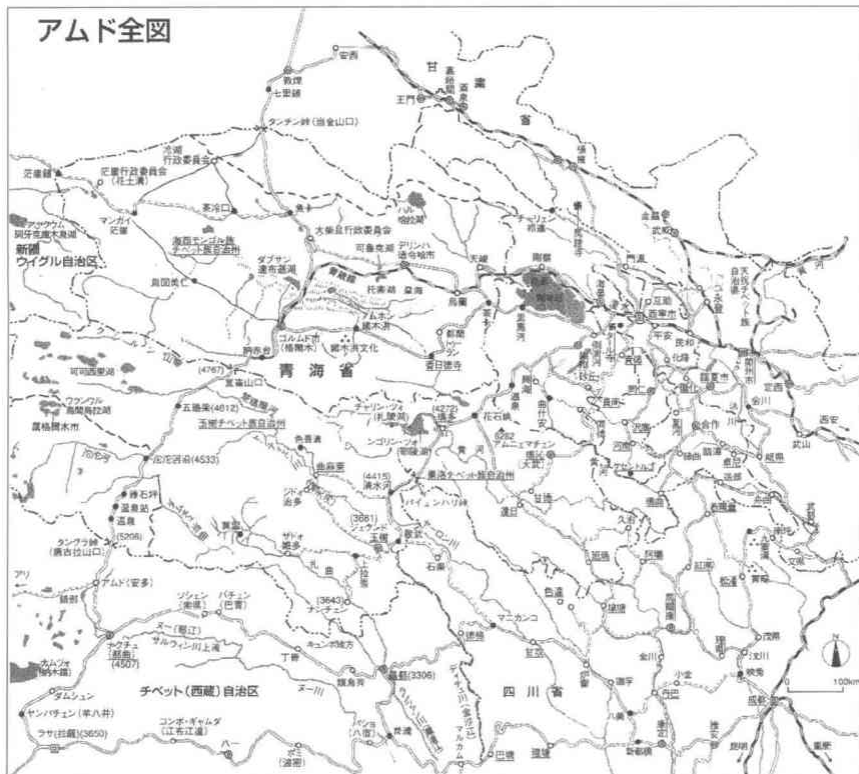
中共＝解放軍は、帰順してきたアムド各地の少数民族の旧支配者（モンゴル人地域では旗長＝王爺など、チベット人地域では千戸・百戸など）に新しい官職をあたえてすみやかに新政権

を打ち立てた。<sup>⑥</sup> 県レベルでは、たとえば甘肅南部の夏河県ラブラン＝ゴンパの実力者ロザン＝ツェワン（寺主ジャムヤン実兄）を蘭州へ連れて行ったように、民国政権とチベット人旧支配者を排除して軍政委員会が政権を掌握したが、郷村では旧権力はそのまま維持された。牧畜地帯では旧支配層に対して「不分不闢・不画階級」「牧工牧主兩利」、つまり階級区分をせず、大土地所有者の耕地を分配せず、旧支配層に権限はないものの名目上は高い地位を与え（「有職無權」）、牧畜労働者と大家畜所有者がともに有利になるようにことを運ぶとする妥協政策をとり、さらに革命戦争を有利に運ぶため貧困牧民に金を貸し減税し畜産品を高く買うなどの福祉政策をおこなった。

一九五〇年二月中共中央ははやくも「少数民族地区での農業社会主義改造問題に関する指示」をだし、民族の特徴と政治・経済・文化の各方面が遅れていることに十分の注意を払い、さらに時間をかけて慎重にゆつくり進めて社会主義改造を実現し、少数民族地区の互助合作運動を健全な形で前向きに進めるよう求めた。<sup>⑦</sup> これは土地改革を含む「民主改革」を、ウ・ツァン（中央チベット）をのぞく民族地域に広範に実施しようとしたものではあるが、まだ具体的日程には上っていない。

のちにみるように「民主改革」はチベット人モンゴル人の伝統的社会構造を改造し、革命後の内地漢人社会と同じような社会を構築することを意味する。寺院・千戸・百戸など封建支配層の権力を排除して中共政権を樹立し、支配層の耕地・財産を没収して農牧民へ分配し、高利貸の清算をおこない、さらに

## アムド全図



出所：長田幸康『チベット』旅行社、2000年、p.188-189をもとに愛知大学大学院室井雅宏が加筆・修正。

「ウーラ」(官吏の出張などにもなう物資提供と無償労働)・徴税・裁判・罰金などを農牧民に課す権力の剥奪というものであった。反乱のきっかけとなった「民主改革」には民主という文字はあるものの、デモクラシーとは関係ない。「民が主である」という意味は、「人民」にはその権力を率先行使する権利はなく、中共解放軍が指導代行し、民衆はそれに従いその恩恵に浴するものである。これが結果したところは、鄉村レベルでの中共政権の樹立と農牧業の集団化である。ところが、中共にとってまことに遺憾なことに、アムドでも支配層だけでなく、「カムバの反乱」同様最下層の農牧民のなかにも与えられた「幸福」を拒否するものがあり、地域によっては全社会をあげて反政府行動を起こした。これがアムドの一九五六年から六〇年あるいはそれ以後にわたる反乱である。

## 二 一九五六年蜂起

初期の反乱がどのようなものであったかについて、『地方誌』によりながらいくつかの地域の概略を見る。アムドの最南部四川省阿壩州では、漢人の多い低地からチベット人羌人の農業地域に「民主改革」の重点を移した。つぎは当然純牧畜

地帯でも実施されなければならなかった。現在の壤塘県北部では、一九五六年三月一〇日には（多分試行的な）「民主改革」を終わった。ところが同県の西北部で第二期の「民主改革」を始めたとき、隣接する四川省のカムパ地域甘孜藏族自治州宗斯溝で、壤塘県上寨の牧民が「民主改革」工作団三〇人を襲撃殺害した。甘孜州では二月に純牧畜地帯で反乱が起きていたから、この事件は阿壩・甘孜両州政府を震撼させた。同じ三月この地域の東に隣接する綿斯甲県（現在の馬爾康県の一部）に集落首長昌旺洛を首領とした農牧民六〇〇余人がとりの村寨（チベット人・羌人の家屋の外壁を共有する密集集落）三〇〇人余と結び、守備隊と「民主改革」工作団を包囲して三〇余人を惨殺した。反乱集団は九の郷、一一〇〇余人・銃八〇〇丁余りにふくれあがった。

これに対し解放軍現地部隊はただちに県政府に一大隊の兵力を集めて、三月二五日から蜂起した村寨をつぎつぎに攻略し、四月に入って叛徒が逃げ込んだ山林に掃討の手を伸ばし、四月一日には、昌旺洛の部衆三〇〇余人を殲滅した。二二日まで、戦闘が一回あり、解放軍が殲滅したチベット人集団は三九八人、鹵獲した銃一三〇丁である。昌旺洛は殺害をまぬがれて地区外に逃れたが五八年に再起する。

阿壩州では、のちの馬爾康県にあたる行政区だけで、五六年三月から八月までの間に蜂起したものの二七〇〇人という。六〇年の統計で全県人口二万一千三百六十六人だから五六年蜂起者の占める割合はほぼ一三％、うち殲滅されたもの一六〇六人。若爾蓋

区では蜂起したものの三五〇〇人、全県人口が二万九千五百九十一人だから蜂起者の割合は一三％、うち殲滅されたものの三〇二〇人。黒水区では蜂起したものの二九〇〇人。全県人口は三万一千四百八十八人だから蜂起者の割合は九％。うち殲滅されたもの五九五人。松潘毛児蓋区の蜂起したものの二二〇〇余人、松潘県人口は一万三千七百七〇だから蜂起者の割合は一五％。うち殲滅されたもの一三五七人。（五七年一月から松潘・麦哇地区では蜂起したものの二〇〇〇余人、殲滅されたもの六六三人。）

以上の状況からすれば、阿壩州では全人口の一〇％強が蜂起に参加し、その六〇―八六％が殲滅されたのである。『州誌』に記された人数が概数ではない場合、「殲滅」は全員死傷・捕虜を意味する可能性があるが、「殲滅」を文字通りに皆殺しでなく、ただ集団の戦闘能力を奪うことと解釈すれば、少なくともこれら集団の三分の一から三分の二が死傷したか捕虜になったことになるだろうか。この事情は以下の記述でもおなじである。

五六年五月八日真夜中に、黄河湾曲部にある甘肅省南部の甘南藏族自治州西倉地区のものと、隣り合うモンゴル人の「河南蒙旗」（青海省黄南州河南県）の賽爾竜（セーロン）郷達参（ダツアン）集落の牧民が解放軍駐屯部隊と工作隊を銃撃した。駐屯部隊は相手が優勢なのを見て達参を撤退した。叛徒は解放軍の倉庫から小麦粉八・五トン・馬料四トンを奪い、事務所を破壊し、つづいて六月九日午後には政府の食料運搬の車隊を襲撃し部隊と政府要員四人を殺し、七人を負傷させ、自動車

四輛を破壊した。その後七回にわたって部隊・工作隊を襲撃、強奪をくりかえしたという。同じ六月九日これに隣接する甘肅省碌曲県では、七〇〇人余りの武装牧民が食料を運搬する政府の三〇両近いトラック列を襲撃した。彼らは、一八日「河南蒙旗」に移動して政府工作隊を待ち伏せ攻撃し、五人を殺害し武器・物資・馬匹を奪った。六月二十四日、青海軍区内衛騎兵大隊の二個中隊が甘南州部隊とともにこれに反撃して、河南蒙旗地域で撃破した。鎮圧部隊側に犠牲者一三人と負傷者二八人が出たというから、戦闘は激しいものであつて、反乱側にはおそろくこの数倍の死傷者が出たことであろう。

ところが「州誌」には、「この反乱が終息してから省・県は工作隊・医療班を二回派遣し、宣伝教育をおこなつて人心の安定をはかり、誤つて民衆を傷つけたまた経済的損害を与えたことに對しては、無料で治療したほか、六万余銀元を与えた」。そのうえ地元の寺院高僧と旧支配層に新政府の高位の官職を与え礼物を送つて慰撫をはかつたという記述がある。つまり、解放軍現地部隊はこの戦闘で「匪民不分」（みさかいなし）にモンゴル牧民を銃撃して死傷させた。そのため牧民の不満がたかまり、事態の收拾に苦慮した当局がやむをえず伝統法にしたがつて死傷者にたいする「命価」「血価」を支払い、牧民が失つた家畜も賠償したのである。

以上の記録からすれば、五六年春の武装蜂起は次のような特徴があつた。①蜂起はアムドの牧畜地帯を中心に散発的に発生した。なぜ牧畜地帯が先行したかはわからない。②反乱集団に

は統一した指揮部がなく反乱集団同士の事前の協議もない。③指導者は旧支配層、ときには一般民衆や寺院の僧侶であるが、蜂起にはいずれも「民主改革」で利益を受けるはずの農牧民衆が多数参加している。④鎮圧時、僧俗民衆が無差別に殺されることがあつた。⑤参加者の半分程度しか銃がなく、それもライフルなどは少なく陳腐化した先込め銃が多い。これらの傾向は五八年の反乱でも維持される。

### 三 急進主義のはじまり

一九五〇年代の半ば、中国には二つの極左傾向が生まれてゐた。農業集団化と反右派闘争である。提唱者は毛沢東である。一九五五年七月三〇日第一回全国人民代表大会（全人代）では、工業の急速な発展を強調するとともに、農業の集団化は「穩歩漸進」（ゆつくり確実に）を決定していた。だが、翌日毛沢東は各省の党書記会議を開き、大会の決定を無視して急速な集団化を提唱し、「穩歩漸進」をブルジョア・富農の見方と断定し、鄧子恢農業相を「纏足をした女のように」ときこおらした。集団化の熱狂が幹部のあいだに起こつた。

五五年一〇月二三日と五六年二月一二日、毛沢東はチベット、北京訪問団やグライラマ事務所の人員を接見したとき、「民主改革」問題をもち出して、改革を恐れるなといった。「シャカムニに学び人民とともに改革せよ」とすすめ、「中央チベットは雲南の方法で『土地改革』をやるべきだ」と提起し、チベットに戻つてグライラマやパンチェンラマとすすめ

方を検討せよとも要求した。<sup>(17)</sup> 当然この指示はラサにもたらされ、僧俗貴族を震撼させた。チベット政策は毛沢東の専管事項だったから、彼の意見は中共中央の誰よりも優先した。

反右派闘争は五七年六月から始まった。前年六月中共中央は党外人士に対し党批判を求めて「百花齊放、百家争鳴」を説き「言者無罪」といった。だが批判が先鋭化するとだちに政策を転換し、批判はブルジョアジーによる攻撃であり「右派」の思想であって「敵対的な矛盾」であるとされた。こうして右派分子摘発は競争となる。海南州では、五七年七月「反右派弁事処」を設置して年末までに八九人を右派分子とし、同州牧畜地帯の同徳県ですら五七年九月から五八年上半期までに一六人を右派分子とした。<sup>(18)</sup>

少数民族地域では反右派闘争は「地方民族主義」批判となり、集團化への躊躇や高度自治要求や漢民族批判が犯罪視された。地方民族主義反対運動と「民主改革」とはからみあつて進行し、全国では一〇万をこえる少数民族の誠実な共産黨員・幹部・知識人が「地方民族主義者」とされ失脚・投獄された。中共中央が大漢民族主義批判を口にしたことはあつたが、半年ともたず、「大漢民族主義者」として咎められたものは一人もいなかった。これは今日でも不公平という以上の意味をもっている。極左急進主義は、これから二〇年間中国の民衆を悩ましづける。

この時期中共中央は少数民族の反乱に直面して、五六年七月全人代民族委員会第三次会議、いわゆる「一七回の会議」をひ

らき、チベット人とイ人のこの春からの反乱について、四川・チベット・青海・雲南の現地指導者の意見をもとめた。「民主改革」の必要を前提としながらも、準備の不足、急ぎすぎ、境界の不明確な階級区分、見境なしの拘束や発砲などが指摘された。なかでも寺院を「民主改革」の対象にするかどうかについては、激烈な論争が交わされた。寺院は男性の多数が出家しており、反乱拠点になりやすかった。最終的に毛沢東が寺院の耕地など財産は暫時動かさないと判断を採用した。こののち中央は「七月指示」を出し、「上層と長期にわたって團結する」「(土地・家屋・家畜・農具など)四つの財産は動かさない」「(反乱鎮圧の中で)一〇回捕まえても一〇回放つ」などの總健な政策を示し、反乱鎮圧現場に譲歩を指示した。ところが毛沢東はやはり急進主義者だった。八月にはいると「戦争は解放戦争であつて、基本的には階級闘争の性格をもっている」との方針を伝達した。地方の党组织が七月と八月の性格の異なるふたつの指示内容を混乱なく実施するのは困難だった。<sup>(19)</sup>

そして中共中央は、かつてチベット政府管轄下にあつたウ・ザンと昌都地区の「民主改革」を六年延期することに決定し、九月に各地方に伝達した。反乱がウ・ザンに波及するのを恐れたのである。<sup>(20)</sup>

ここに、毛沢東が「改革は必要だし、やると決意したらやるのだ」といった「民主改革」の再検討を求めたチベット人がいる。プンツォクワンギェルとタシワンチュクである。プンツォクワンギェルはチベット工作委員会(ラサに進駐し

た中共解放軍の最高機関)の十人足らずの委員のうちでただ一人のチベット人である。当時チベット自治区準備委員会の仕事にたずさわっていたが、五六年反乱発生の一報がとどくと、チベット工委は彼にカムにいつて調査するよう求めた。カムはかつて革命運動を展開した故郷である。慎重な調査後、北京におもむいて自分の見聞を直接李維漢(中央統一戦線部部长)とウランフ(モンゴル人。中央民族委员会主任)に報告した。これは書面に整理され、毛沢東・周恩来など中央の指導者に提出されたという。第一に改革前のさまざまな準備ができていない、第二は宣伝と教育がおこなわれていないため一般民衆に理解がない、第三は上下左右の協議が不十分なことなどである。彼の報告は実態に即してことをおこなうよう求めていた。彼はカムとアムドで「民主改革」をひとまず中止し、民衆の願望がどのあたりにあるか、なにをやりなにをやってはいけないか、誰とともに「民主改革」を進め誰を孤立させるのかといった「民主改革」のコースを描きなおしてほしかったにちがいない。

もうひとりとタシワンチュクはアムドにいた。彼は五六年四川省甘孜州と阿壩州と青海河南蒙旗の反乱鎮圧のやり方を批判した。寺参りと読経の禁止に反対し、寺院を「民主改革」の対象にすることにも反対した。「宗教教義と党の政策に大きな違いはない。例えば善良、慈悲、平和などだ」ともいつて仏教を擁護したことがあったという。五八年初めの省党会議では省最高幹部を除名するとともにタシワンチュクを右派分子と

して批判した<sup>(26)</sup>。批判は主に一九五七年八月「青島民族工作座谈会」の発言にむけられた。彼は、「チベット人は地域、経済生活、言語文字および心理状態がすべて統一されている。比較的早い時期に政治上も統一されていた。後に統治階級が分断して統治するという政策を実行したために、チベット人地域は四分五裂にされた」といい、西康省(カム東半分)の四川省への併合に反対し、ウ・ザンにカムとアムドを加えた大チベット人自治区を要求した<sup>(27)</sup>。

「青島民族工作座谈会」は全人代ののち中央民族委員会が開催したもので、百数十名・二六の民族の代表が集まった。当初自由な発言を保障していたので漢人のやり方に対する不満があらさになり、新疆のチュルク系民族からは民族共和国の設立とソ連型連邦共和国など分離独立の要求が出された。この場ではタシワンチュクが大チベット人自治区を主張したほか、ブツォクワンゲルがチュルク系民族と同じ要求をした可能性もある。だが周恩来は少数民族の要求をことごとく退け、清朝以来の行政区画を維持することとし、民族共和国を拒否した。これは少数民族マルクス主義者の度肝をぬくものであった。そして民族主義的な主張をした代表らの運命はここに定まった。

二人のチベット人革命家は硬骨漢であった。チベット人社会をよく知るものとして、「民主改革」をむりやり実行することに反対した。もちろん反乱鎮圧が革命戦争だという見解にも同意できなかっただろう。タシワンチュクは僻地ゴロク地方

を担当するなどチベット政策の経験がゆたかだった。五九年の青海統一戦線工作会議でも直言を辞さず、五八年の反乱鎮圧の拡大に反対し、「民国時代にもこんなに大量のチベット人が殺されたことはない」と発言した。さらに人民公社にもあえて反対し、「棍棒を使って（農民）民衆を天国（すなわち人民公社）へ追いやってはならない」と発言して激しい批判にさらされる。

#### 四 五八年蜂起の様相

五六年蜂起は解放軍によって一時的に鎮圧されたものの、ゲリラ戦は五七年もつづいた。反乱鎮圧のなかで解放軍による「民主改革」すなわち集団化が進んだ。五八年になって人民公社が組織されたと戦闘の規模は拡大した。

#### 阿壩州の場合

阿壩州は遊牧地域である。五八年八月一日に四川省阿壩州党委員会は、農業地帯に遅れること二年、牧畜地帯の「民主改革」を決議したが、若爾蓋県当局は州党機関の決議以前から「民主改革」を進め、まず貧困農牧民を教育して「民主改革」のための「積極分子」二七二九人を養成した。これは三戸に一人の割合だから、「民主改革」は民衆の意志として実施できたはずだが、後の経過を見るとそうではない。

工作隊は、事前に「反動中上層」とその手先・悪党とされた人物一三四人を「学習」のために県城に連れて行った。六戸

か七戸に一人の割で事実上の予防拘禁をしたのである。「積極分子」を通して戸別訪問や小集会、鉄砲狩りをおこない、旧支配者六〇余人に対しては「面對面」の「訴苦」闘争（後述）をやった。また「反動中上層」とその手先を一三四人捕まえ、三人を監視訓練処分とした。各種の集会は二二三二回を数えた。同時に旧支配層と「富牧」の家畜、牛一万三六九八頭、馬六六一頭、羊七万八七六七頭を没収して六か所に「公私合営」「社私合営」の牧場をつくった。農牧民を苦しめた高利の負債は一律に帳消しにされ、農牧民は「民主改革」によって一戸当たり八六・五四元を得た。牧畜集落では、牧野・草山の封建的土地所有制を廃除し、「土官」・首長の持つ権力の——労役をさせ、税金を徴収し、差し押さえをしたり、司法警察権を行使するなどの——すべてを剥奪したが、「愛国守法」の人物からは家畜を没収・分配しなかったという。

若爾蓋県のほか、五九年一月までに牧畜地帯の阿壩県（州ではない）・理県でも、おなじような「民主改革」を終わった。壤塘県では五八年一月一日には、扎興本三郎を首領とする一五〇〇余が結集し、千余の銃をもって立ち上がった。翁達では再起した昌旺洛を首領とし、七〇〇余人が五〇〇余の銃をもっていた。その他に班瑪から鴨爾塘・牙魯郎姑一带にも叛徒八〇〇余人がいたという。五九年三月、反乱は拡大して一二集団三五〇〇人となった。当時の壤塘県人口は二万弱だから反乱集団は壤塘県成年男子の半数近くを結集したことになる。壤塘の反乱鎮圧工作は、戦闘二三回、殲滅した叛徒二八四五人、



鹵獲した各種の銃二一八四丁となった。戦闘が終わるとすぐに「民主改革」がおこなわれ、一月末には完成し七五%の農家を合作社に組織した<sup>①7</sup>。

阿壩州の中共解放軍は、すでに四月下旬、「民主改革」を軍事手段によっておこなう体制を整えていたから迅速にこがはこんだ。各県は党・政・軍・民の統一司令部を作り、チベット人民兵三四九〇余人・民衆の連合防衛組織一万四〇〇余人を組織し、解放軍一個連隊・騎兵二個連隊を主力として鎮圧に向かった。さらに多くの戦力を戦闘に割くため、行政機関幹部も武装し隊・班に組織した<sup>①8</sup>。五九年四月中旬にいたって、解放軍は黄河湾曲部で千余の反乱集団を全滅させ、討伐と政治工作をくりかえして敗残者三三三人を投降させた。五六年以来の若爾蓋反乱はこれによってほぼ平定された。紅原地区では、五月から八月末までに牧畜地帯の大きな反乱集団は殲滅され、一八七回の戦闘で倒された蜂起者は三三三三人となり、鹵獲した銃六七丁となった。

こうして、五九年中に大きな反乱鎮圧は終わったが、生きのこりの反乱集団は四川・甘肅・青海の省境地帯で小さな事件を起こしつづけた。若爾蓋・壤塘・茂汶・黒水といった地域では、六〇年もお武装抵抗がつづき、解放軍は、年末までにそれぞれ数十人から数百十人を殲滅するか捕虜としており、最終的な反乱鎮圧には六一年正月までかかった<sup>①9</sup>。

五八年春から始まった蜂起では、一二月までにアバ（阿壩州の一県）・若爾蓋地域では殲滅したものの三四四二人。同じ時期

壤塘など牧畜地帯でふたたび蜂起したものの三五〇〇余人、一月までに殲滅されたものは二八四五人（殲滅率は八一%）に達した。さらに五九年四月から八月までの四か月間に、阿壩州の牧畜地帯で殲滅されたものは七八七九人にのぼる<sup>②0</sup>。

#### 青海省黄南州の場合

五八年初め、黄南藏族自治州の反乱側のスローガンは「民族と宗教を守れ」であった。首長や僧侶らは「合作社は財産を（取り上げて）公のものにする」「蒋介石・馬步芳がまもなく戻ってくる」「共産党は馬の年にはひっくり返らないが犬の年には必ず倒れる」「集団化は政府が財産を取り上げることだ」などと民衆に語ったという。これに対し中共黄南州委と各県委は五八年二月から内部で動員をすすめる緊急措置をとったので、多くの地方では問題は起きなかった、起きたのはかぎられた地域だ<sup>②1</sup>という。緊急措置の内容は旧支配層の予防拘禁と民衆の武装解除である。

ところが武装蜂起は広範に起こった。黄南州では一九の郷二五の集落で反乱がおき、叛徒の数は一万一〇〇〇人に達した。州人口は八万八〇〇〇人だったから人口にして一二%程度、一世帯ごとに参加者一人とすればほぼ半数の参加率である。殺害された地方幹部七八人・民兵一五人、奪われた軽機関銃四丁・小銃とピストルなど多数、さらに連れ去られた羊二万一五六一頭・牛六八五六頭・馬四二一頭というものであった<sup>②2</sup>。

これに対し、青海南部鎮圧部隊指揮部は海東地区循化県城に

チベット人集団を殲滅したのち、五月四日、二個連隊と砲兵一個連隊および砲兵と歩兵の混成大隊を西の黄南州に進め循環から逃げた武装集団を掃討した。六月初め、甘肅省甘南州の掃討部隊と連絡しあつて河南県（河南蒙旗）の柯斯托洛乎（ケセントルゴ）草地・吉什電卡（ジシュロンカ）の包囲殲滅戦を戦い、反乱集団の主力を殲滅した。こののち解放軍主力は西進して海南州に移動し反乱鎮圧にあたつたが、一部部隊と民兵は引き続き黄南地区にのこつて掃討作戦をおこなつた。一時息をひそめた蜂起側は、五八年冬になつて（冬季休養のためか）蘭州軍区主力部隊が現地から引き上げるとまた活動をはじめた。五九年春四月になつて解放軍黄南支隊は什蔵地区の集団二〇〇余名を殲滅し、河南・沢庫などの純牧畜地帯で掃討作戦を進めた。一月、黄南支隊と省軍区独立大隊三個中隊はそれぞれ同仁（レゴン）・河南にとどまつて冬を越した。抵抗は一九六〇年になつても続いたが六〇年下半年までには徹底的に鎮圧できた。三年間にわたる鎮圧の中で、黄南州だけで動員した部隊や民兵は一八〇〇人余り、うち八九人が犠牲となつた。

### 青海省海南州の場合

五八年六月に、海南州同徳（カワスムド）・貴南（ティカ）・興海（ツィコルタン）三県地域だけで三万余人の蜂起があつた。五八年の三県の人口は一二万弱と推定できるから、参加率は二五％という高さになる。五八年に殲滅されたものは蜂起者の二〇％前後から地域によっては九〇％近くになる。これにつ

いて『海南州誌』は、「反乱鎮圧闘争の初期、少数の指導者は中央の方針をよく理解せず、階級闘争を強調しすぎて民衆と叛徒をいっしょくたにし、叛徒側も民衆を陣地の前線に立たせた」事実があり、解放軍は「軍事的掃討作戦を展開するときも、善良なものを傷つけるといふ重大な過ちを犯した」といつて、無辜の民衆を殺傷した事実を認めている。

また、海南州では「民主改革のなかで処分された各種犯罪者は一万六七二七人、州人口の一％を占める。うち集中訓練一万〇二七六人、逮捕六四五一一人である。六一年左傾政策の一時緩和のとき、省委指示にもとづいて再審査をおこなつた結果、原判決維持一二五七人、刑期軽減一六五七人、教育釈放三〇九二人、無罪釈放一九六人、「管制」取り消し一七八人、労働教育解除九人と決定した」。だが、これでは六三八九人にしかならない。犯罪者として処分された残り一万〇三三八人はどうなつたのだろうか。

### 果洛州の場合

果洛（ゴロク）蔵族自治州は、カムに属する玉樹蔵族自治州とともに青海最奥部の牧畜地帯にある。民国政府時代は西寧軍閥馬步芳の重税に抵抗し大虐殺にあつてゐる。以下、『果洛州誌』によつて記す。

一九五七年、達日果紅科集落首長阿西巴才らが、哈姜塩地で「塩警」四人を撃ち殺した。これが反乱の始まりで、五八年初め、彼らは近隣三集落で人馬をあつめ、解放軍偵察小隊を狙撃

## 海西州の場合

ツァイダム盆地を含む海西蒙古族蔵族（哈薩克族）自治州の反乱・逃亡の規模や時期については具体的にはあきらかではない。しかし、『州誌』大事記には、「五八年から六〇年にいたる間の反乱防止工作のなかで『ダライ・ラマ集団反乱事件』に關与したという疑いをかけたものを含めて六九三人逮捕、一万一二八二人に対し集中訓練をおこなった」という。これが事実なら、子どもから老人までたかだか一万九〇〇〇人の人口しかないモンゴル人・チベット人社会の六〇%、おそらくは幼児と老人をのぞく成人男女のすべてが反乱鎮圧の対象になったことになる。またこの運動のなかで一三二人が右派分子とされて投獄された。二〇数年後の八二年になって逮捕・誤判・集中訓練を受けた冤罪事件の一八二一人を無罪とした<sup>(39)</sup>というが、これは当時のモンゴル人・チベット人の一〇%にあたる。

## 五 反乱か「逃散」か

五八年以後『地方誌』には、中共解放軍に抵抗するというよりは、集団逃亡が記録されるようになる。このなかで規模の大きな集団をとりあげて、反乱の性格を考えるよすがとした。

(1) まず、青海黄南州にあらわれた「海東地区循化県城の反乱集団」から見る。これは二か月前の五八年三月に循化県で蜂起し解放軍に打ち破られたチベット人集団である。当時、循化

県の「民主改革」未実施地域は、チベット人郷一一のうち四つを残すだけになっていた。青海省政府はここに工作組を派遣して、いきなり牧畜の集団化を強行しようとした。当局は事前に旧支配層を県城に集め、「学習」の名目で予防拘禁した。拘禁された中にインドウゴンパ（温都寺）ラマ（活仏）で副県長の職を与えられていたゲネフ（加乃化）ラマがいた。ラマは十世パンチェンラマの幼時の師匠で民衆の間に声望のあった人である。四月一七日循化県剛察郷首長ヌリゴンボ（奴日洪布）は剛察郷に來た工作組を襲って指導者を射殺してから、ゲネフ（加乃化）ラマ救出を呼びかけて、武装した数百人のチベット人とともに県政府に行き、回人（漢語系ムスリム）の一部と結んで、商店などを略奪焼き討ちし県政府を包囲攻撃した。つづいて二四日には、パンチェンラマの出身地温都郷など近傍の集落から隣接する黄南州同仁（レゴン）からも民衆が集まって四千という集団になり、循化県当局にゲネフラマ釈放を求めた。二四日午後、ヌリゴンボらは解放軍が黄河対岸に集結したのを発見すると、混乱に乗じて逃走した。二五日未明、解放軍二個連隊が黄河を渡って、残っていた「叛徒」を包囲した。彼らは丸腰の、ただラマを救出したいだけの僧俗民衆であつた。解放軍はこれに銃撃を加えてたちまち五〇〇人余りをなぎたおし、女性や老人をふくむ二五〇〇余人を「捕虜」とした。当時循化県のチベット人人口は一万千余しかなかった。ゲネフラマは知らせを聞くと、「学習班」で自殺した<sup>(40)</sup>。このヌリゴンボ集団が西の山を越えて黄南州に逃亡

し幹部と兵士を殺傷し、さらに隣接する四川の阿賽瓦集団とともに、解放軍偵察小隊三三人を待ち伏せし全部殺害した。八月、達日の反乱集団は、戸数二〇八八・七六七二人に達し、六日前後、区政府と騎兵二団の団司令部を二回にわたって包圍攻撃し、県に送る銃を奪い護送していた幹部を殺害した。五九年初めになっても勢いは衰えず、達日県副県長桑吾ら五人を殺害した。

五八年五月一日、久治県では、「民主改革」工作者が支配者の家畜を「公私合營」牧場に組み入れようとしたのに抵抗し、一八八〇戸・七九一六人が武器一二〇〇余りを持って決起した。こののち、班瑪県の班前・果芒・灯塔・智欽・邦義・德昂（郎本）などの寺院を拠点に、武装反乱が起きた。また農耕地帯では亜達洛（班瑪県副県長）・加旦洛を頭として、牧畜地帯では嘎道如（果洛州副州長）・維力（班瑪県長）を頭として、新政権の首脳に任命された旧支配層が二三四八戸・八八九二人を率い、統一三〇〇余をもって反乱をおこした。

五八年六月二〇日、瑪沁県党委では蜂起を防ぐため工作団を組織し、楊坤生書記らが引率して解放軍とともに四二人で（不穏と考えられた）東柯河を偵察し、民衆を集めて銃を取り上げようとした。ところがかえって武装集団に包圍され、六月三〇日六時から一六時間つづいた戦闘で、幹部四人は殺され、馬四一頭・ヤク二〇頭を失った。

五八年末までに果洛州の反乱参加者は一万〇六七三戸・四万四五二三人に達した。中央はすでに「軍事的打撃をくわえ、政

治的にかちとり、民衆を動員する」方針を制定していた。この意味するところは、反乱鎮圧にはまず軍事行動である。これによって五八年一〇月、果洛西部反乱鎮圧指揮部が成立し、蘭州军区騎兵一・二・三連隊のほかさらに騎兵一師団・五五師団一六五連隊を反乱鎮圧に投入した。五八・六〇年の三年の反乱鎮圧で六五六回の作戦をおこない、二六三八人を倒し、八一七七人を捕虜とし、反乱側にいた民衆二万一八〇〇人余を「解放」した。解放軍は戦死二六六人、負傷二八五人であった。

五九年四月になつて流浪していた集団四〇〇〇人を班馬で発見、一八〇〇人を殺した。これはゴロクと四川北部の牧民であった。その後も散発的抵抗がつづいたのでこれを討伐し、一九六二年末になつてようやく反乱鎮圧部隊の大半が果洛を引き上げることができたという。完全鎮圧までの時間が長引いたのは果洛州が遠距離にあつて補給が困難であつたためと思われる。

この数字を機械的に合計すると蜂起集団は三万二六〇〇人となる。一九五七年に果洛の人口は五万八一〇九人というから、いわゆる叛徒は全州人口の五六%をこえる。二三年後の一九八〇年に、反革命事件四五七四件について審査をおこない、九〇%ちかく四〇七八人を無罪とし、刑を免除するもの刑事責任を追及しないもの二四八人、再審減刑八人、原判決維持二四〇人としたという。

し、山地と放牧地にこもって解放军に抵抗したのである。

(2) 五六年に反乱を起こして無差別殺戮を受けた「河南蒙旗」の達参・斯柔群哇・柯生木・外斯などの牧民は、五八年五月三日ふたたび結集した。『河南県誌』にはほとんどが「脅迫された」牧民であったという。それに参加した戸数一五九七戸・人数七四八七人。そのうち武器をもつ叛徒は一七三二人、銃は一三五七丁、乗馬は二五三五頭だった。『河南蒙旗』は五七年二五〇九戸、人口一万二二〇人、五八年二二一八戸、一万〇五〇〇人。だから、反乱と見なされた人数は河南蒙旗の戸数にして六四%、人口にして七〇%を超える。銃の数は五人に一丁に達しない。ほとんどが家族連れで、馬も人数の三分の一しかない、機動力のない集団であった。一九五八年、「民主改革」直前の当局の調査によると河南蒙旗（「河南蒙旗」）で出兵できるもの三五〇九人・銃一八二六丁といふ。

六月一日早朝全員が黄河北岸のケセントルゴ山（いまタシデレ山とよぶ）に集結し、黄河を渡って南に逃亡しようとした。このとき黄河対岸の甘南州欧拉（ゴラ）にはチベット人四〇〇人余りが待機しており、濃霧に乗じて渡河するモンゴル人を掩護しようとしていた。解放军騎兵一師は遠距離から急襲する作戦をとり、明けがたに叛徒を包囲して遠方から攻撃をはじめたというから、おそらくは野砲と機関銃によるものである。殲滅戦は午後六時には終わった。この間に、射殺したもの二六五人（うち首謀者二人・中核分子一人）、負傷したもの一四三人（うち主謀者五人・中核分子一人）、捕虜五八四人（主謀

者一人・中核分子四〇人）、投降してきたもの四七六人（うち主謀者七人・中核分子五九人）、逃げて黄河におぼれたもの一一五人、その他の死者一人、合計一五九四人を殲滅するといふ「戦果」を得た。逃げたものは一三七人、持って逃げた銃は一〇〇丁。一〇日には逃亡したものを掃討し鎮圧を終え、戦闘力のある叛徒の九二・二%を殲滅したといふ。最後の河南親王（女性）ザシツアイランはこの事件には参加しなかったが中立の態度をとったためか、文化大革命のとき非常な侮辱と迫害を加えられ、「自殺した」とされている。

(3) おなじ五八年、海南州同徳・貴南両県の県界にある居布林における殲滅戦は、海南反乱鎮圧司令部がおこなった最大規模の作戦だったと思われる。反乱参加者は、同徳県一八の郷のうち九つの郷、貴南県一九の郷のうち一四の全部あるいは一部である。反乱集団は合わせて三二〇〇戸余・五〇〇〇人余と『州誌』はいふが、のちには一万をはるかに超える。各地で分散して活動していた反乱集団は、各個撃破を避けるため居布林地区に逃げ込んで深山密林をたよりに集中して守りを固めた。守りきれないときは黄河を西に渡って興海県加扎地方の草原に逃げ、さらに果洛・玉樹を経てウ・ザン（すなわち中央チベット）に逃げる計画だった。海南前線司令部は連隊規模の作戦を展開し、七月下旬までに、一万数千の蜂起集団を包囲しこれを打ち破った。居布林地区反乱集団の死者一一六三・負傷二八七・捕虜二二七〇といふ。死傷した馬四九四・分捕った馬三五五・押収した各種の銃一〇七・銃弾一八九七・刀剣一二二

二・望遠鏡一であった。その他に叛徒の半数をしめる家族五九〇〇人が降伏した。反乱鎮圧部隊の犠牲者は指揮員一・一・負傷三九・行方不明九。各種弾薬の消耗六万八七一九発。死傷した戦馬一〇・失った銃七・壊れた八九型無線機二であった。忘れてならないのは、反乱側も捕らえたチベット人幹部・積極分子などに対して残忍な報復をやったことである。鎮圧の後も小規模なゲリラ戦はつづいた。そして、『海南州誌』は、一九六一年三月、「危険で手が血に汚れた匪賊」ジャウワンダ（加吾完徳）を射殺し、海南州の反乱鎮圧はようやくおわりを告げたという。

## 注

- 〔1〕「カムパ「反乱」の記録について——甘孜藏族自治州民主改革史」の検討「愛知大学現代中国学会『中国21』（Vol.16）、二〇〇三年。
- 〔2〕チベット人は自らの地域を主に方言と地方文化によってウ・ザンと、カム、アムドにわけける。ウ・ザンは現在のチベット自治区から昌都地区を除外した地域で、中央チベットとも呼ばれる。「カムパの反乱」で知られたカムは、今日の自治区昌都地区、四川省甘孜藏族自治州、雲南迪慶藏族自治州と青海玉树州である。
- 〔3〕ここでは、清末民国初、現地の土司に代えて中央直接支配のため官僚を送り込んだことを指す。
- 〔4〕後述。注〔22〕。
- 〔5〕チベット人社会の伝統的構造は、ハフル・ユカルとよばれる最小放牧単位（数家族の血縁集団）の集合体をつオワとい

長をツォホンといった。中国語の百戸集落にあたる。同じ仏教宗派あるいは寺院によって構成されたツォワ連合をシエカといい、これを統括したのがツォワの中のもっとも有力な集落の長である。清朝はロブサンダンジンの反清蜂起ののち、それぞれに長に千戸・百戸の職称を与えた。清末海南州には千戸一四・百戸百余戸という。

- 〔6〕当代中国民族工作編集部『当代中国民族工作大事記』民族出版社、一九八九年、六三頁。
- 〔7〕四川省阿壩藏族自治州阿壩縣地方誌編集委員会主編『阿壩縣誌』民族出版社、一九九七年、八頁。
- 〔8〕省阿壩藏族自治州地方誌編集委員会編『阿壩州誌』民族出版社、一九九四年、七六七頁。
- 〔9〕河南蒙古族自治県は、一七世紀アルタイ地方から南下してチベット高原全体を制圧し、ダライラマ五世を政權に就けた、ホシエートモンゴルの末裔である。
- 〔10〕黄南藏族自治州誌編集委員会編『黄南州誌』甘肅人民出版社、一九九九年、一〇二九—一〇三〇頁。
- 〔11〕甘南藏族自治州誌編集委員会編『甘南州誌』民族出版社、一九九九年、九七頁大事記。
- 〔12〕『黄南州誌』一〇二九—一〇三〇頁。
- 〔13〕チベット人地域には人命・財産に損害を与えた場合、刑事罰を課さず民事賠償をする習慣があり、死傷者にたいする補償の場合これを「命価」「血価」とよんでいる。河南蒙旗のモンゴル人もこの習慣を持っている。
- 〔14〕青海省黄南州河南県地域（河南蒙旗）では一期三中全会以後、この地域の民衆の申し出により、五六年反乱事件の再審査をおこない、河南県委が調査して、「連参地区反乱は郭乃亥・金巴・多爾傑曲洛乎などがやったことで、民衆はだまされ被害を受けたものである」ということにした。

(15) 『州誌』などのグラビアで五〇年代民兵のもつ銃を見るとわかる。『地方誌』のなかには、反乱鎮圧のとき解放軍は遠距離から攻撃を開始したという記事がある。それは先だめ銃の有効射程のそこから攻撃したものである。

(16) 第一回全人代では、集団化は自発性・相互利益を基礎として貧農に依拠する、強制に反対して中農の利益を損なわない、(集団化に加わらない)個人経営にも積極的な援助をあたえるとした。内地では、集団化された経営は六〇万に達していたものの、行政的強制的におこなわれていたうえ、その経営内容はよくなかった。鄧子恢らは合作社がうまく経営されていない実態を見ていた(姫田光義ほか『中国近現代史』下、東京大学出版会、一九八二年、五七六頁)。

(17) 郭冠忠「西藏民主改革の回顧与研究」上・下、『西藏研究』一九九八年第二期—第三期。

(18) 海南藏族自治州地方誌編集委員会編『海南州誌』民族出版社、一九九七年、三〇頁。

(19) 『同徳県誌』一九八四年版、一一頁。『同徳県誌』は、①深林・王基信、張兆明、恒秀編撰、一九八四年版と、②同徳県地方誌編集委員会編、民族出版社、一九九九年版がある。以下、①を『同徳県誌』一九八四年版、②を『同徳県誌』一九九九年版と記す。

(20) ジャンベンジャツォ「中共一六回大会に特別招待されたチベット人老紅軍 天堡」『中国民族』民族団結雑誌社、二〇〇二年一月。

(21) 中共甘孜州委党史研究室『甘孜藏族自治州民主改革史』四川民族出版社、二〇〇〇年、『甘孜藏族自治州民主改革与平息叛乱大事記』を参照。

(22) チベット政府とのあいだに結ばれた「十七条の協定」からすれば、「民主改革」実施も延期もチベット政府と協議しなけ

ればならないが、そうした証拠はない。

(23) 一九二二年、四川甘孜州巴塘生れ。チベット共產党創設者。人民解放軍のラサ進駐後大チベットを目指す。チベット工作委員会の中で唯一のチベット人委員。ラサ工作中はダライラマとも親交があり、五八年地方民族主義者とされ、六〇年反革命の容疑で逮捕、投獄される。獄中一八年ののち、七七年釈放。『弁証法新探』一月には液体がある。『自然弁証法新探』など哲学書を出版。

(24) ダウエイシラオ(達威喜繞)『葛然朗巴』平措汪傑(平汪)小伝(私家版)一二頁(b)。残念ながらこの報告書の詳細はわからない。

(25) タシワンチュクは、四川甘孜人(カムパ)、家庭成分貧農。一九三五年カムを通過した中国工農紅軍第四方面軍に参加のち第一方面軍。甘孜博巴(ボエバ)政府騎兵大隊隊長。一九三八年延安で入党。青海省委书记、青海副省長、八大代表、行政八級という歴戦の闘士であった。五八年失脚し文化大革命では労改農場に追いやられ、文革ののち中共青海省委常任委員、書記に復活。二〇〇三年一〇月逝去。

(26) 青海省党委員会は、一九五八年一月二日から開いた省委全体会議(拡大)で、中共中央の少数民族政策と宗教政策に反した右派分子・反党集団として、漢人指導者の中の「穩歩漸進」派とでもいうべき人々を除名し、タシワンチュクを職務から追放した。除名処分を受けたのは省委書記で省長の孫作賓・河南県(河南蒙旗)書記の潘光亞・省婦聯主任劉杰・省高級人民法院副院長高繼先らである。河南蒙旗書記のほかは省最高級幹部の除名だが、当然中共中央からの指示によるものである。これら人物を排除して「民主改革」から人民公社への道を整備したのである。

(27) 『中国共产党青海省第二届委员会第五次全体会议(拡大)』

文件彙編」上冊、一九五八年一月二〇日中共青海省委辦公厅編印。「青海省委關於第二屆委員會第五次全體會議（擴大）的簡要報告」一九五八年五月一〇日（中央に向けての報告）一七一—一九頁のうち一七頁。また、「青海省委第二屆委員會第五次全體會議（擴大）關於扎喜旺徐同志錯誤問題的結論」八二—八三頁。

〔28〕中共は一九四九年の建国直前、人民政治協商會議の「共同綱領」でそれまで掲げていた少数民族の分離独立・民族自決権を否定した。にもかかわらず「青島民族工作座談会」でチュルク系指導者がソ連型連邦と民族共和国を要求したのは、それまで八年間少数民族マルクス主義者の間でこの問題がずっとくすぶり続けていたことをものがたる。なぜなら、当時はソ連があらゆる政策のモデルだったから、自治区はいずれ連邦構成民族共和国に発展すべきだと考えていたのである。中共中央にいたウランフですら建国二年前「内モンゴル国」を求めたことがある。

〔29〕李志剛「藏族人民的優秀兒子」青海藏族研究会刊行雜誌『青海藏族』二〇〇四年第一期。

この発言で、タシワンチュクは文化大革命のときも攻撃対象となり、吉林と湖北の労働農場へ追いやられた。二〇〇三年一〇月に九一歳で亡くなった。

〔30〕『阿壩州誌』六一頁。

〔31〕四川省若尔蓋県地方誌編集委員会『若尔蓋県誌』民族出版社、一九九六年、六一—六二頁。

〔32〕『若尔蓋県誌』一二二頁。短期間に二千有余の人間を教育できるはずはないからこの数字には誇張があるものと思われる。

〔33〕『若尔蓋県誌』六一—六二頁。大家畜所有者が自分で牧畜を經營していたものを公有化したとき「公私合營」といい、牧

民に家畜小作をやらせていたとき「社私合營」と呼んだ。

〔34〕『阿壩州誌』一〇〇頁。すでに反乱が起きた地域では、反乱未参加の上層人物は「保護過関」（監視対象）とした。

〔35〕『壤塘県誌』七七四—七七六頁による。

〔36〕一九五九年当時の壤塘の人口は、一万九四五八人（『壤塘県誌』一〇二頁人口統計）。

〔37〕『阿壩州誌』七七六頁。

〔38〕『阿壩州誌』七七六頁。

〔39〕『阿壩州誌』七八頁。

〔40〕『阿壩州誌』七七六—七七九頁。

〔41〕『黄南州誌』一〇三〇頁。

〔42〕『黄南州誌』一〇三一頁。

〔43〕『黄南州誌』一〇三一頁。

〔44〕『黄南州誌』一〇三二頁。

〔45〕『海南州誌』六五二頁。

〔46〕『海南州誌』六五二、三一—三三頁。

〔47〕ゴロク地区はラサ・成都・蘭州などから遠く、仏教の信仰はあったもののラサの直接の影響も歴代漢王朝の支配も及ばず、独自の文化圏を構成していた。近代になってようやく西寧軍閥馬步芳の支配地域となったが、アムドワではあるものの、ときにはそれとは区別される場合がある種族である。

〔48〕果洛藏族自治州地方誌編集委員会編『果洛藏族自治州誌』民族出版社、二〇〇一年、四二二頁。

〔49〕『果洛藏族自治州誌』四二二頁。

〔50〕『果洛藏族自治州誌』四二二頁。

〔51〕『果洛藏族自治州誌』四二二頁。

〔52〕『果洛藏族自治州誌』四二二頁。

〔53〕海西蒙古族藏族自治州地方誌編集委員会編『海西蒙古族藏族自治州誌』卷一、陝西人民出版社、一九九五年、「大事記」。



〔54〕ジャンベンリギヤツォ『班禪大師』東方出版社、一九八九年、九〇―九一頁。これには日本語訳がある。池上正治訳『パンチェンリマ伝』平河出版社、一九九一年。

〔55〕河南蒙古族自治県地方誌編集委員会編『河南県誌』甘肅人民出版社、一九九六年、七三〇―七三二頁。

〔56〕『河南県誌』一九三頁。

〔57〕陳慶英、何峰編『藏族部落制度研究』中国蔵学出版社、二〇〇二年、二六〇―二六一頁。一九五八年「民主改革」直前の調査によると、青海省黄南藏族自治州のチベット人モンゴル人集落では、出兵できる農牧民一万九〇〇〇人、銃は七千丁という。銃で武装できるのは二・七人に一人だった。たとえば、沢庫県四三八一戸・一七三九二人のうち、出兵できるもの五五三五人、長短各種の銃三〇七七丁。同仁県六九二六戸・三二五〇九人のうち、出兵できるもの七八七〇人、所有する銃一六〇一丁。尖扎県三三三七戸・一五八二人のうち、出兵できるもの二〇九一人、長短の銃三四一丁。幕末の長州では出兵できるもの三万四〇〇〇、(砲を入れなければ)銃は一万五〇〇〇丁というから銃だけ見れば同じようなものだ。

〔58〕『河南県誌』七三〇頁、『黄南州誌』一〇三二頁。

〔59〕以下は『同徳県誌』二冊の「軍事編」五八年反乱鎮圧に関する記述、『同徳県誌』一九八四年版、二五一一―二五四頁、『同徳県誌』一九九九年版、三七九―三八二頁による。

〔60〕『海南州誌』六〇五頁。ジャウワンダについては、「州誌」は人物伝のなかで、かなり詳細に記述しており、生前すでに民衆の伝説的人物となっていた可能性がある。

〔付記〕小論を書くにあたり、東京大学大学院広池真一氏から資料について重要な示唆を受け、また地図作成は愛知大学大学院室井雅宏氏の手をわずらわせた。